

---

# 幽霊？拳で叩き伏せるッ！！

夢餓鬼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊？拳で叩き伏せろッ！！！！

【ZU-1】

N  
9  
5  
2  
8  
Y

【作者名】

夢餓鬼

【あらすじ】

「死ネやコラァ――！！！！！！！！（怒）」

ひよんな事から幽霊が見えるようになった小太郎。…そんな彼の趣味は『幽霊イジメ』!! 転校してきた少年が、小太郎を激闘の世界に引きずり込む!!…はたして、小太郎は無事でいられるのか?

シャーマンキングの二次小説を見てみて、余所々以上に少なかったことに絶望しました！私の作品を見て、もっとシャーマンキングの二次小説を増やせるよう、頑張って面白い物を書いていきたいです！

## 幽霊と踊る(?) 少年(前書き)

はじめまして!!

この作品は作者の気まぐれなため、更新は不定期です。

幽霊と踊る(?)少年

彷徨える死者の魂

大地の森に息づく精霊　そして神仏

それらと自由に交流し、人間ではなしえぬ力をこの世に行使する者たちがいる

彼らは『シャーマン』と呼ばれた

「…ファアア~~~~アッ!……あ~~~~かったるい……(眠)」

埼玉県×××市ふんばりが丘：私立森羅学園に続く朝の通学路を一人の少年が歩いていていた。

欠伸を掻きながら眠そうに歩いて来る少年、……彼の名は『江碕えどぎ小太郎こたろう』と言う。森羅学園中等部、1年C組の13歳の中学生だ。

：外見は黒目黒髪と日本男児の色をしている。眉は細長く、眼は他人と比べると少し睨んでおりいつも不機嫌な顔をしている印象が特徴的な顔だ。

服装は夏用の制服を着ているが：シャツのボタンは全部はずし、中に来ている黒色のタンクストップが見えている状態になっており、全体的に見るとガラが悪い感じが滲み出ている…

身長160cmと中学生にしては少し高めの方であり、それが返って周りを威圧するように感じられる。

：傍から見れば普通の中学生に見える彼にも、誰にも言えない秘密がある。

それは、俗に『幽霊』と呼ばれるモノを、彼は見る事が出来るのだ。

：彼が幽霊を見れるように目覚めたのは小学5年生の前期頃で、切欠は『両親の死』出会った。

その日、学校から帰ってきた小太郎は家で自分の両親が返ってくるのを待っていた。：しばらくすると電話がかかってきて、小太郎が受話器を取ると両親が死んだ事を知ってしまう。：死因は『交通事故』故。

在り来たり過ぎるかも知れないが、それを知った小太郎はひどく悲しみ、大声を出しながら一晩中泣きじゃくっていた。



以来…流稀は幽霊全般が嫌いになり、今ではサンドバックよろしくヒドイ目にあわせていた。

「…チツ！今日はこの辺で勘弁してやるよ…」

「……ブヒィ……」

小太郎は一通り幽霊をシバキ倒すと、自分の近くにいた中学生達がこちらを向いているのが眼に入る。

…普通、幽霊は一般人には見えない。傍から見れば小太郎は、一人で大声を上げながらジダンダしているように見えるだろう。周りの学生たちがヒソヒソと影口をたたく。…しかし、

「…あー？……失せろや…ッコラ…！！！」

生徒達を見ながら低い声で言う小太郎。すると言われた生徒達は影口を止め、一斉に前を向いて歩き始めた。

…ちなみに、流稀は人間も嫌いである。

小太郎は顔のせいか、学校の先輩たちにも呼び出しなどくらい…流稀は逆にボコボコにして叩きのめす。

おかげで中等部では喧嘩最強とまで言われ、結構恐れられる存在となっている。

…小太郎の近くに人がいなくなると、またダルそうに学校に向かう。

(…今日も机で眠るツと…)

そんな事を欠伸をしながら考え、自分の教室まで歩き出す。

…しかし、小太郎は知る由もない。

…今日、転向して来る少年が自分の運命を変える事を、自分がとん

でもない戦いに巻き込まれていくなど、夢にも思っていないだろう。



**幽霊と踊る(?)少年(後書き)**

ありがとうございました

## 主人公登場（前書き）

感想や評価をもとむ！

## 主人公登場

朝の出来事の後：小太郎はいつものように教室に入ると、直ぐに自分の机に座りそのまま突っ伏して眠る体制を取る。

どうやら彼は、このままお昼ごろまで眠りに入るようだ。：明らかに眠りすぎである。

：しかし小太郎が眠りに着こうとした瞬間、大声で話し合う話が聞こえる。

「だから本当に見たんだってば！！あの墓地で！幽霊が！星見ながらワイワイやってたんだよ！」

（…何だあ、うるせ なあ？……ぶつ殺すぞ……！！？）

いきなりの騒ぎ声で不機嫌になる小太郎。：顔を上げて声の発信源を睨みつけて見ると、何やら興奮した様子で二等身（小っさ！）の同級生が騒いでいた。

「そりゃばくだってこの目で疑ったさ！」

「俺はお前の頭を疑うぜ まん太よ ー」

「うほっ！？」

二等身の子（確かまん太って名前だったか？）の言葉に同級生が呆れて喋りかけている。：まあ、このご時世でそんな事言ってるや普通に通に頭がおかしいと思うしな…

「幽霊なんてんなもんいるわけねーだろ」

「どうせ何かの見間違いでしょ」

「お前 勉強のしすぎで頭 疲れちゃってんじゃねーの？」

「いや っつーかこいつは霊に疲れてるんだろ？」

「うまいっ！」

幽霊を掛けた洒落に爆笑する同級生達。

…いや、正直そんなに面白くないぞ！？　むしろサブイボ立ったわ！！

同級生達の言葉でキレルまん太、そこに教師が教室に入ってくる。

「うるせえぞ何さわいでんだ小山田！<sup>ホームルーム</sup>H・R始めっから席に戻れコラ」

「あッ！先生だ」

教師が来た事で小山田が席に戻り、教室が静かになっ……てねーよ！！メツチャ騒いでるぞ！！？

先生来たつてのに生徒達自由気ままに騒ぎまくってんだけど！？ちやんと席に着かせろよ！！

「…あー…つうわけで今日からテメェらに突然の知らせがあるんだがー」

無視！？この状況で無視！！？何でコイツラほっといてんの！？明らかに話来てねーぞ、こいつ等！？？

…もう、背景の効果音にワイワイ、ガヤガヤ、ギャッハッハツとか明らかに漂ってんだろーが！？

なんだ！？…もうこの教師諦めてんのか！？もう止める気もないってか！！？…教師やめちまえよ！！！！

「転校生の朝倉 葉君<sup>うづ</sup>だ」

教師がそう言くと、廊下から見るからに『ユルそうな』雰囲気を出

している少年が入ってきた。

…というか、このタイミングで転校生の紹介！！？生徒達もいつの間にか全員席に着いてるし！！？

「…あー彼は家の事情で単身 出雲からやって来たそうさ。つつうわけでデメエらもいろいろ面倒見てやってほしいって…んん！？なんだ小山田！？変な力オして」  
教師がビツクリしながら人間の限界をはるかに超えるほど口を開けているまん太に質問する。

「…こっ」

その状態で何かを言おうとするまん太、…てか、顎外れてんじゃねーか？

「ここここいつだあーっ！」

(ピキッ…！)

そして突然、大声で叫びながら転校生に指を指す…周りの同級生もビツクリし、伏せていた小太郎の額から青筋が浮き出る。

「みんなッ！こいつだよこいつが例の幽霊男さ！」

「ゆ…」「ゆうれいおとこ…！？」

(……………)

まん太の言葉に教室がざわついていく。…それを見ていた葉は少し何か考え…、

「幽霊なんているわけないだろ っていうかお前 誰？」

「何いい …！！？」

まさかの知らない人発言！！転校生の言葉で周りは爆笑し、まん太は机を叩きながら絶叫する。

すると絶叫していたまん太の後頭部に剛速球の上靴がブチ当たった！！

「いった

！！？」

突然の痛みにビクリしながら上靴の投げられた方向を涙目で見る。

「うるせ

。次喋ったら、ぶっ殺すぞ……！」

滅茶苦茶不機嫌にまん太を睨みながら低い声で呟く小太郎。  
そのやり取りを見ていた生徒達は一斉に口をふさぐ。

葉もその光景を見ていたが、小太郎の方を少しだけ見つめるだけであとはユルそうにしていた。

しかしそんなやり取りなど知ったこっちゃないばかりに、小太郎は静かになった教室の中で机に突っ伏して惰眠を貪り始めたのだった。

次に小太郎が眼を覚ました時はすでに放課後になっており、教室には誰ひとり残ってはいなかった。

「どうやら、彼は一日中眠っていたらしい……勉強しろよ。」

小太郎は欠伸を一つして立ち上がると、かばんを持って学校から帰宅することにした。

帰宅途中、小川が流れている橋を歩こうとすると小太郎は意外な人物に出会った。

今日転校してきた少年が橋の手すりに腕を置き、何やら空を眺めながらボーとしていたのだ。

…そんな葉を眺めていると、今日自分のクラスに転校してきた葉という人物だと小太郎は思い出す。

一体こんな所でなにしてるんだと葉を見て観察していると、突然葉は息を吐き出し…

「あ　　っ自然と一体になるって、気持ちいいーなっ！」  
そんな事を言いながら笑顔で言う葉。…は？一体何言ってるんだコイツ？……サイコ野郎か？

「なんじゃそりゃあー！」  
「んあ？」「おお！？」

…小太郎が胡散臭そうな目で葉を見ると、突然電柱の陰から小山田まん太がツツコミを入れてきた。いきなり怒鳴ってきたので小太郎も驚いた声を上げてしまう。

「ああッ！　しまった！つい突っ込みが！！…で、なんで江崎までここに！？」

「あれ？…お前たしか教室で寝てたやつ」

「…俺がいちゃあなんか不満でもあるのか…てめえ…ッ」

小山田のツツコミに小太郎の存在を知る葉と少し低めに呟く小太郎。

…取り合えず三人一緒に土手に並んで座り話をする事に。

小山田の話によると…今日の教室の一件で納得しきれないまん太。絶対正体をあばいてやる！！…と一人意気込み…放課後、葉を隠れながら尾行することに。

そしてこの橋に立ち寄った葉を見はる事約三時間！！…さすがに苛

々しながら見つめていると、突然葉のキチガイ発言勃発！さすがに我慢できなくなりつい大声でツツコンでしまい現在に到る。と…、

…なんて言いますか、ハッキリ言って時間の無駄以外の何者でもない！！

三時間もこんな所でボーっとしているコイツもそうだが…それをズーっと見ていたまん太も相当である。

そんな会話を聞いていた小太郎は、心底呆れた様子で二人を見下していた。

「ははは そうか                      それでオイラの後をつけてきたのか。そりゃ悪いことをしたなー」

「……！？」

そんな明らかなストーカー発言にも葉は笑いながら喋っている。その様子にまん太も疑問になってしまふ。…ちなみに、小太郎にそんな真似をした場合は問答無用で叩き潰されるだろう…。

「え…！？怒ってないのかい！？」

「なんで？お前オイラが学校で知らんぷりしたからついて来たんだろ？」

「…んなつ！？じゃっ    じゃやつぱり！」

普通に幽霊が見える事をカミングアウトする葉…拍子抜けしすぎて逆に驚いた小山田と小太郎。

「いやあ…オイラ面倒くさがりだからさあ    学校で秘密がばれて騒ぎになるわけにはいかんかったのよ」

「…ひ    秘密……！？」

「ああ    オイラ    実は修行のためにやって来た    『シャーマン』な



んだ」

…いきなり自分の秘密を喋り出す葉の言葉にこの場が静かになる…。

「シャ… シャーマン…！？（シャーマンって何だ！？ っていうかこいつ…！それは秘密なんじゃなかったのか

ッ！？ 何故あつさり言う！？）」

（…今日のメシ何にすっかな…？）

「！？」

…葉がいきなり秘密を暴露したため小山田は！？マークを浮かべ混乱し、それを不思議がりながら笑って見ている葉。…小太郎はもうすでに話を聞いておらず、今日の晩御飯の献立を考えていた。

「うえっへっへっ シャーマンはあの世とこの世を結ぶ者 困った事があつたら いつでも呼んでくれよ力になるぞ」

そう言いながら立ち上がると、葉は夕日の沈む方に歩いて帰って行った。

…そして、この場に残ってしまった二人はその後姿を眺めて見ていた。

「…なんなんだ、アイツ…ッ！？」

「…よしっ！今日は鮭の焼き魚にしよう…」

…まん太の疑問に夕飯の献立を言う小太郎。

…ちなみに、小太郎の夕飯はコンビニ弁当になっていた。

## 憑依合体での戦闘(?) (前書き)

シャーマンキングの小説、もっと増えればいいのに…。

感想などお待ちしております。

## 憑依合体での戦闘(?)

葉のカミングアウトから一日経ち…小太郎は自宅で寝苦しい夜を過ごしていた。

あれから家に帰って学校に行き、そのまま放課後まで眠っているために今日はなかなか眠れない。

…というか、こいつ学校に何しに行ってるの？

寝むれない小太郎は「そう言えば…ッ」っと学校で寝る前の出来事を思い出す…。

…今日も机で眠ろうとする小太郎。だが、昨日に引き続き教室が騒がしい。

イラつきながら音のする方に眼を向けて見る…すると、昨日転校生と一緒にいた小山田が痛々しく身体に包帯を巻き付けた姿が目に入った。

なんでも、夜中に近くにある墓場に一人で忍びこみ、墓場に屯っていた悪どもにボコボコにされたらしい…。

それを聞いた小太郎はまん太を見て、

(…フツ、間抜けな奴…)

っと、結構ヒドイ事を考えながら眠そうな目で眺めていた。

…その後、同級生達に笑われていたまん太に転校生が介入してきたらしいが…残念ながらその後、小太郎は惰眠を貪り始めたので良くはわかっていない。

つか、他人の事などハッキリ言ってどうでもいい小太郎は気にするそぶりも見せなかった。

…そんな事を思い出しながら眠ろうとする小太郎だが…部屋が暑苦しすぎて全く眠れない。

「ッッガアアア!! 暑ッッつ苦しいんだよ!!! 死ねよ、温暖化ッ!!!」

小太郎は理非人過ぎる事をどなり声を上げながら部屋を出ていく…どうやら散歩に出かけるようだ。

勢いで外に飛び出し、取り合えずブラブラと夜の街を充てもなく歩き回る。

…小太郎が墓場の前を通ろうとすると、突然墓の方から叫び声が響いた。

「なんだ…？こんな時間だから幽霊どもが騒いでんのか……………ち  
ようどいい！」

…俺のストレス発散にご協力してもらおうか！！？（笑）」

…そんな快楽殺人鬼発言全開の事を言う小太郎は墓場の方に顔を向  
けると、ニヤツと効果音が付きそうな暴力的な笑みを浮かべてその  
まま墓場の中に勢いよく突入した！

…コイツ、絶対に主人公向いてねえ！！

墓場に近づいていくにつれ、声がさっきよりも鮮明に聞こえて来る。  
…アレッ？っていうかこの声…

「って もう目の前だし！！かえって助からないから！帰して！」

「ああ…！？テメエ…今オレらになんつつた…………？こっから出てい  
け…！！？」

…ブッ！殺されてあの世に行きてエのかコラア」

小太郎が声のする方に顔を向けると…そこには葉とまん太、それと  
明らかに不良ですよと自己アピール満々の男たちが睨みあっていた  
…どうやら喧嘩でもおっぱじめるらしい。

そんな緊迫した空気に当てられてか、小太郎がニコニコと笑いなが  
ら葉達のいる方に歩み寄っていく。

「よゝ二人さん！こんな夜中に何してんだ？…随分面白そゝな事に  
なってるじゃないの（笑）」

「あれっなんだ、おまえ小太郎じゃないか？」

「!？何でまたキミがここにいの!？…それよりもここから助けてッ!」

突然、小太郎が登場したことにより二人は驚く。

「ああん!？また人が増えたぞ、コラア!」

「どうします、竜さんッ!？」

向こうも小太郎が現れた事に少しだけ騒ぎ出す。…どうやら、あの『竜さん』と言われたリーゼントが頭の様だな…。

「ッ構わねエ、アイツも一緒にあの世に送ってやるだけだ!」

『さすがは竜さんッ!!!』

どうやら小太郎も一緒に叩き潰すらしい…ていうか、夜中なのに入るせよコイツ等。

「っていうか…そのあの世の連中があんたらをメーワクだと言ってるんです」

腕を腰に当てながら言い放つ葉…その言葉を聞いた不良共は爆笑する。

…だからうるせえって言ってるんだろうがッ!!

「ブッ!」

「ぶわ　　っはっはっ!また霊だとよ!!」

「バーカ!竜さんは霊なんかちつとも怖くねーんだぞ!」

小太郎も怖がないんですが…それどころか幽霊シバキ上げるんですが。…明らかに霊よりも恐ろしい存在だからね!

「オウよ!やれるもんなら…」

「やればいいんだろ?」

『!?!』

「さっきからもう戦いたくてウズウズしてるんだだよな　『阿弥<sup>あみ</sup>だまる

陀丸』！」

葉がそう言い…その後ろから長髪の侍…『阿弥陀丸』が姿を現わした…！…突然の事にまん太と小太郎もビックリする。

「サツサムライの霊…！？」

「！ビックリしたア…驚かすなやコラア…！！（怒）」

《この度は拙者の屈辱をはらす機会を与えて頂き感謝するでござる！ 葉殿…！！》

小太郎達の言葉を無視し、相手の方を見て睨む阿弥陀丸。…その言動がさらに小太郎をイラつかせる！

「屈辱！？ 屈辱つてもしかしてこの幽霊…！」

「おいコラッ！無視してんじゃねーぞ！？（怒）…たかが霊ごときが俺の話をッ…」

「あの…！！こわされた首塚の主…！！ 『阿弥陀丸』…！！…伝説の侍…！！（たっ…！たしかに本物のサムライなら木刀なんかメじゃないはず…！ でも…！！…）」

叫ぶ小太郎の言葉を遮り、言葉を放つまん太。それに気付かぬまま恐る恐る竜達の方を見る。

「…オイオイオイ…いいかげんにしろよオイ！ まだ阿弥陀丸とかいうクソの話か？」

（ホラやつぱり奴らにその姿は見えてないし！ もちろん触れる事だって出来ないだろう！ しょせん霊だもの…！！）

葉達の言葉に顔の血管を浮かせながら言う竜、それを見たまん太も身体から冷や汗を流す。

（一体どうするつもりなん…）

「オイ…スぺースショット（あだ名）！アパッチ（あだ名）」

竜が名前を呼ぶと筋肉ムキムキの男が二人現れる…！…なんか、この

言い方気持ちが悪い。

「！」

「奴らを…ブツ殺せエエ！！！」

リーゼントが叫ぶと、男たちがこっちに向かって勢いよく突進してきた！！

「だああああっ！！ききき来たよ！！どうすんだよ！！　せっかくのサムライも霊じゃ意味ないじゃないかーッ！」

「テメエー等！！だから人の話を最後まで聞きやつ…！」

「ハッハッハッうるせえな」

不良がこっちに向かってくるとまん太が葉に泣きながら縋り付き、葉はなぜか笑いながらこの状況を見ている。

「それじゃ　いっちょ見せつけてやろうか阿弥陀丸」

《ウム》

「お前の剣技とオイラの能力が**あわ**されば　無敵になれるってことを…！」

葉がそう言い右手を出すと…阿弥陀丸がヒトダマになり、葉の掌に収納される。

「ヒッ！？ヒトダマになったっ！？」

「言っただろう　あの世とこの世を結ぶ者　それがシャーマンだってな…！」

カツコよく説明する葉、その間にも不良たちはこっちに近づいて来る！

「サーモン？」

「食いてエのか！　コラア！？」

声に出していたのを聞いていたのか、間違った言葉を聞き返す不良た



ち。…おまえらもう喋るな。

「死ねえ

ッ」

「行くぞ！」

葉はヒノタマを持った右手を身体の横に持って行き、そのまま身体に押しつけるようにヒノタマをねじ入れようとした。…が、その時！

「憑依合ッた！うるせえーッ！！人が喋ってるときに、口出しなんかしてんじゃねーぞ、コラア  
！！！！！！（激怒）」  
…え？」

葉が阿弥陀丸を入れようとした瞬間…話を邪魔されて苛々していた小太郎が怒りの雄叫びを上げ、こっちに向かってくる不良二人を殴りつける。

ドゴンッ！！！！

「ごふおおおおおッ！！？」

…決して人体を拳で殴っただけではない鈍い音を響かせながら、不良たち二人は空中に吹っ飛ばされた。

「……………ッえ？」

その光景を見ていた全員（阿弥陀丸含め）が空中にブッ飛ばされた不良たちを見る…。

そして吹き飛ばされた二人が地面に音を立てて落ちると、残った不良たちが叫び出す。

「えええええッ！？？」

「パッ！パンチ一発で…！！？」

「あの二人がやられた！？」

「ていうか何だよあの音！？人間の出せる音じゃねえ！！」

「どうなつてんだこりゃあつ！！」

そりゃあ自分達より明らかに年下の奴にやられれば目を疑うだろう。  
…運がないわゝコイツ等。

「あ　　ツムシヤクシヤするう！！！！この霊共を叩き潰してストレス発散しようと思ったが…止めだツ！！テメー等で俺のストレスを発散させてやる！！！！（ギロリツ！！）」

小太郎はそう言うと言と不良たちの方に顔を向け、…まるで『閻魔』の如き形相で竜達を睨みつける。

睨まれた不良達は悲鳴を上げ明らかに腰が下がり、傍にいた葉達も顔が青くなる。

「なつ…！（なんだコイツツ…！？地味だと思っていたら滅茶苦茶喧嘩強えーじゃねえか…！！てゆーかなんだよあのパンチ力…！ありゃ堅気なんてもんじゃねーぞ…！！）」

明らかに身体を小刻みに揺らし、眼を見開きながら小太郎を見る竜。  
…明らかにランクが違うツ…！！

「…あーツ！！思い出した…！！…竜さん！そいつ『森羅の撲殺王』っすよ…！！」

…小太郎を見て思い出した不良…ボールボーイ（あだ名）は怯えながら小太郎を指差し叫ぶ。

『江碕　小太郎』…彼は学校で自分に喧嘩を売った者を残らず買い、片っ端っから叩き潰してきた。

そしてその事が噂になり、名を上げるために周辺の不良たちが小太郎に喧嘩を吹っ掛けて来たのだ。…だが、それでも小太郎は喧嘩を買い…その圧倒的すぎる暴力で全てを叩き潰す…！！

それが切欠でさらにエスカレート。…同い年の中学生だけではなく、高校生、暴走族、警察、外人部隊…拳句の果てにヤの付く人たちまで狙われるようになった。だが…小太郎はそれをモノともせず、戦い続け、こっちに移ってきて半年間の間、かすり傷一つ負う事もなく屍の上に立ち続けたのだ…。

…彼は戦う時、何故かいつも恐ろしい笑みを浮かべて喧嘩をすると言う。

笑みを浮かべたまま相手を叩き潰す姿はいつしか、全ての者が小太郎を見ると恐怖と尊敬の念でこう呼んだ。…『森羅の撲殺王』と…。

「こいつが…その『森羅の撲殺王』だと…!!?」  
ボールボーイの言葉に驚愕する木刀の竜…。明らかに身体の震えが激しくなる。

「…チツ！チクショウ！！なめんじゃねえぞ！！ コラア！」  
自暴自棄になった竜は木刀を振りかぶると、そのまま小太郎に突進していく…明らかにやられ役だっ！！

…振りかぶった木刀が小太郎に当たりそうになった瞬間！

「臍物ぶちまけて死ネやツ コラアアアアアアアアアアアッ！  
……………!! (超怒)」

小太郎の怒りの籠った右アッパーが竜に向かって放たれる…!!

ドッゴ

ンッ…!!…!!…!!

「グッバァァァァァァッ!!!?」

振り下ろした木刀は小太郎の拳により砕け散り、そのままの勢いで竜の顎に突き刺さった。

…その攻撃を受けた竜は空中を飛び、仰向けになって地面に叩きつけられながら落ちて来た。

「ああッ」「竜さんが負けた　　ッ!？」

『ぎゃあああ　逃げるッ』

残っていた不良たちがそう言うと、竜を連れて全力で逃げていく…。

「ふう~~~~ッ!…ま!少しはすっきりしたかなあ…!」

あとには笑顔でそう言う小太郎と…それをポカーンと見ていた葉達だけが、この墓場に存在していなかった…。

こうして

僕と葉くん、小太郎くんと魂の世界を巡る冒険が始まったのです。

まん太

## 憑依合体での戦闘(?) (後書き)

小太郎「…やっぱ此処の霊共でストレス発散するか…」  
残った全員「『止めるッ(でござる)!!!』」「」

突発的なネタ

「泣く子も黙る『木刀の竜さん』とは俺の事よ!」  
「硫酸?」「化学薬品か! コラァ!?!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9528y/>

---

幽霊？拳で叩き伏せろッ！！

2011年11月29日20時51分発行